

Title	福音の包括的なミニストリー (パネルディスカッション「震災への関わりと震災の語り」)
Author(s)	倉沢, 正則
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 63-68
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5337
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第三回東日本大震災国際神学シンポジウム】

パネルディスカッション「震災への関わりと震災の語り」

福音の包括的なミニストリー

倉 沢 正 則

はじめに

東日本大震災（以下、震災）国際神学シンポジウムも三回目を迎えることとなり、今回も震災の苦難の意味を深め、多くの教派・教団、団体相互の交流を広げ、今後一〇〇年を見据えた日本宣教へとビジョンを仰ぎ、次世代を担う人々にその志を託す有意義な機会となればと願っている。今回のシンポジウムのテーマに添いつつ、主催者側から提案された三つの問いに応えるかたちで私の発題としたい。

1. この大震災をどのように理解し、語っていくか

マグニチュード九・〇という観測史上最大の巨大地震とそれに伴う津波に見舞われた東北地方太平洋沿岸地域での死

者・行方不明者一万八五二四人（二〇一四年一月一四日現在）の大惨事は、「たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだつても、その水かさが増して山々が揺れ動いても」（詩篇四六・二三、新改訳）のみことばを現実のものとして覚えさせた。この現実性は、被災者の方々の苦悩と悲痛の中で、私たち教会が信じる天地の主なる神が、彼らの「避け所、力、助け」として信頼に足る「神」であるのか、その真価がまさに問われているということの意味する。被災地の教会とその現実に関わり添い、共に重荷を担おうとする全国の諸教会・キリスト者の信仰と共に働く愛による協働こそが、この「神」を現し、語っていく歩みであると言える。

今回の震災を通して、陸・海のみでなく、私たちのあり方や考え方そのものも「揺り動かされた」。人間の叡智の結実である科学技術の進歩はいつしか過信と驕りとなつて、「想定外」というような用語そのものを発するほどとなった。人間のコントロールがすべての領域をも凌駕するなどと考えていた考え方そのものに、強烈な一撃となつて、人間が限りなく「有限」であることと、時に人間の生活世界を一瞬で飲み込む自然世界の営みへの畏怖を改めて思い起こさせられたのである。巨大堤防の崩壊や福島第一原発事故はその証左である。神の創造された世界を「従えよ、支配せよ」（創世記一・二六、二八）と神に命じられた人間の創造の意義とその意味を今日的なコンテキストでもう一度検証し、罪人である人間の果たすべき責任の枠組みを改めて構築しなければならないだろう。

多くの犠牲者を偲び、また、被災者・避難者を支えるためにも、私たちのあり方や考え方の「揺り動かし」へのチャレンジに真摯に応えて、キリスト教世界観に即した人間の「良きあり方（wellbeing）」を広く市民社会に提示し、地域社会にキリスト教の貢献を果たしてゆかねばならない。このような意図で、東京基督教大学（TCU）は、テンブルトン財団の研究助成を得て、「The Theory and Practice of Christian Ministry in the Face of Natural Disasters」という研究プロジェクトを向こう三年間立ち上げる。その目的は、「身体的・心理的・社会的・スピリチュアルという世界認識の四層を包含する総合的な『ケア学（Care Studies）』の構築」である。大枠では、「自然神学」からの問い、「ケアの倫

理」からの問い、「キリスト教と地域社会」からの問いを設定して、これらの問いに対応した活動を三つ取り上げる予定である。理論と実践をカバーして研究会、セミナー、ワークショップ、シンポジウムを開催し、その成果を印刷・電子媒体で刊行する予定である。

2. 震災を通して福音派キリスト教がいかに社会に関わってきたか、

また今後関わっていくことができるか

第一回ローザンヌ世界宣教会議（一九七四年）の『ローザンヌ誓約』は、これまでの伝道重視の宣教理解から伝道と社会的責任の両方を含む包括的（ホーリスティック）な理解へと改めた。福音を「ことばと愛のわざ」を通して伝達するという宣教の新たな理解以来、教会の社会的な関わりにより積極的に目を向けるようになった福音派諸教会は、社会の正義と公正のための社会的な行動を起こし、教育や福祉という社会的奉仕にも取り組み始めている。けれども、その意識と広がりはまだまだであり、教会は「内向き」傾向であることは否めない。しかし、震災は教会を「内から外へ」と押し出した。被災地には地域教会もあり、苦しむ地域の人々と共に苦しんだ。さらに、会堂が救援物資の拠点となり、人々をつなぐ中継点ともなり、人々の心に教会は「開かれた」空間ともなっている。同じ生と死の現実に向き合い、将来の不安に直面し、苦難の意味を分かち合う機会が訪れている。

緊急支援や復興支援において、地域のコミュニティの世話人や要人との協働という関わりが発生し、具体的な支援の実施において内外のキリスト教諸教派・教団、団体の協働もさることながら、地域連携の中に教会という市民社会の一組織形態が覚えられ、組み込まれていく機会となっている。どの団体や人々と、どの働きやレベルにおいて、どのよう

な理念や目的をもつて、どれくらいの間協働できるのかという実践が各地でなされているが、それらの考察から「協働の神学」が震災を通して提示されてくることを期待したい。これらの経験と神学は、今後も予想される大規模地震への教会とコミュニティとの協働やグローバル化の中での在任外国人への支援などの取り組みが教会に求められてくる時、大いに役立つに違いない。さらに、震災復興・自立支援において、教会の「心のケア」が地域社会で求められるような信頼醸成へとつながる関わり方が問われてきている。震災は、神学から現場での実践という方向とは逆に、現場から「福音の包括的なミニストリー」を考えざるを得ない状況を生み出してきたと言える。教会を構成する一人ひとりが、福音の理解を深め、その生活世界での実践、すなわち宣証が求められているのである。

3. いかにしてみことばを語っていくか

震災からの復興において「心のケア」が求められる時期にきている。子ども支援や高齢者支援等の働きが広がりつつある。今回ホイートン大学から、心理学的なアプローチの中で、その支援に携わる人々への教育プログラムが備えられている。そこで、福音を「ことばとわざ」で表す包括的なミニストリーにおいて、「いかにしてみことばを語るか」は知恵のいるところである。キリスト教の福祉団体や救援団体による働きは広く行われているが、身体的・心理的支援は容易でも、スピリチュアルな支援、特に、福音を直に語る機会に乏しい。それぞれの専門分野に特化しがちとなる。地域教会が主導して行う「愛のわざ」としての働きという場では、福音を語り易いとも言える。ただ、相手から信頼され、安心されるという関係が築かれるまでは語っても「聞かれず」、かえって、反発と誤解を生むことになりかねない。

T C Uの卒業生である藤敷庸一牧師は、奉仕する白浜バプテスト基督教会で、前任者からの「いのちの電話」の働

きを受け継ぎ、和歌山県白浜町で自殺防止と共同生活による経済独立支援を行っている。NHKのテレビ番組「プロフェッショナル」でも取り上げられたが、毎日のデボーションでみことばに聞き、行政とのタイアップで職を探し、生きる意味と自立のための、まさに「総合的なケア」を実践している数少ない教会である。さらに、共同生活者を用いた「弁当屋」を立ち上げ、その収益分でその弁当を「無料」で貧しい人々に配る働きもしている。そのような中で、キリスト者が起こされており、さらに彼らが入所してくる人々へのケアに用いられている。

私が属する日本同盟基督教団（以下、同盟）は、震災後の東北宣教のあり方について、同盟の宣教研究所で検討してきた。特に、三陸沿岸の地域の人々への「総合的なケア」を主眼にした宣教を目指している。その中で課題として、第一に、地域社会の必要に寄り添う宣教は地域の人々との信頼関係構築という地道で長期の取り組みとなることから全教的協力（人的・財的・霊的）が必須であること、第二に、人口が少なく、復興支援にもばらつきのある三陸沿岸での教会開拓は、従来型（一教会堂一牧師）とは違うあり方や方法をも考えておかねばならないこと、第三に、地域社会の必要に寄り添う宣教は震災以来すでに近隣の教会・教団やクリスチャンNGOとの協力の中で進められていることもあり、特定地域の人々への責任ある働きを担う際に、協力関係にある他の教会や団体とどのように調整し、相互理解とさらなる協力を得てゆくことができるかということが上げられた。その地域の方々が、「ことばと愛のわざ」によってキリストの福音に触れ、その身体的・精神的・社会的・霊的需要が満たされ、そこにキリストにある群れが起こされて、彼らが善き隣人となって地域の人々と共に生きるようになるという目的にその心を一つとされ、それぞれの持ち分を活かす働きができればと願う。キリストにある者たちが互いに協力し合い地域の人々に仕えてゆく中で、その人々からキリストの証しが求められるような関わり合いができれば幸いである。

おわりに

震災を通して、多くの内外からのボランティアが被災地で復旧・復興・救援活動に従事してきた。多くの若者がこのボランティアに参加している。特にキリスト者の若者は人々を助けるといふよりも、震災ボランティアの活動を通して自らの生き方や考え方を探らされ、これからどう生きるのかを考えさせられる機会となっている。被災者の現実、自分の生活への「振り返り」を促し、被災者の何気ない言動の中に、逆に大いに励まされ力をもらうという不思議な交流が醸成されている。被災者とボランティアが被災地で手を取り合い、「明日」を共に生きようとする協働が、さらに続く復興に向けた息の長い歩みへの大きな励みと希望につながるものであつてほしい。次世代の絆が震災という痛みの中で強固なものとなるような関わり合いを今後も続けてほしいものである。

「苦難を通して、壁を越えて、次の世代へ」という課題は、キリスト者とその教会が日本の人々に、特に被災地にあつて、「福音の力」そのものを示せるか否かにかかつている。キリストを死者の中からよみがえらせた神の全能の力が、一人ひとりの苦難に意味を与え、様々な隔ての壁を打ち崩し、次の世代に希望と勇気を与えるものであるのかを試される時であるにちがいない。